
 学 会 記 事

第 28 回リバーカンファレンス

日 時 平成 16 年 3 月 13 日 (土)
午前 9 時 30 分～

場 所 新潟ユニゾンプラザ
4F 大会議室

I. 一 般 演 題

1 興味ある画像所見を示した硬化型肝細胞癌の
1 例

長谷川勝彦・坪井 康紀・杉谷 想一
曾我 憲二・柴崎 浩一・野本 実*
日本歯科大学新潟歯学部内科
新潟大学大学院医歯学総合研究科
消化器内科学分野*

症例は 60 才, 男性. 平成 15 年 2 月, 肝 S3 に約 2 cm の低エコー病変を指摘. 5 月の CT で病変は約 3.5cm に増大し 6 月に入院. HBs Ag (－), anti HBc/CLIA (5.02 弱陽性), HCV-RNA (－), 日本酒 2 合/日, AFP 4.0ng/ml, PIVKA-II 17mAU/ml, ANA 80 倍, AMA < 20 倍であった. MRI は T1WI で Low, T2WI で High, Feridex 造影効果 (－), Dynamic CT・DSA・CTHA では病変はリング状に早期濃染し遷延する著明な造影効果を認めたため, 肝原発悪性腫瘍が示唆され, 患者の同意を得て当院外科にて外側区域切除術を施行した. 病変は 3.8cm × 2.8cm, 白色調, 皮膜形成なし, 線維の増生, 中分化異型細胞の索状配列, 門脈塞栓を認め硬化型肝細胞癌と診断した. 背景肝は慢性肝炎 F1/A2 の組織像であった. Dynamic CT・DSA・CTHA の所見は病理組織像を反映しており, 硬化型肝細胞癌を認識する有用なサインと考えられた.

2 画像にて経過を観察しえたウイルスマーカー
陰性肝細胞癌の 1 例

太田 毅・兼藤 努・玄田 拓哉
見田 有作・小林 正明・須田 剛士
鈴木 健司・渡辺 雅史・野本 実
青柳 豊・大越 章吾*・市田 隆文*
白井 良夫**

新潟大学大学院医歯学総合研究科
消化器内科学分野
同 生命科学医療センター分野*
同 外科分野**

3 肝細胞癌と他臓器の同時性重複癌の診断と治
療

田崎 麻子・稲吉 潤・加藤 俊幸
新井 太・船越 和博・本山 展隆
秋山 修宏・太田 玉紀*

県立がんセンター新潟病院内科
同 病理*

肝細胞癌と他臓器の同時性重複癌の診断と治療について検討した. 肝細胞癌 415 例中 82 例 (19.8%) に重複癌を認め, そのうち同時性重複癌は 34 例 (8.2%) であった. 平均年齢は 67.1 歳で, 男女比は 5.8 と男性が多かった. 臨床的特徴として HCV 陽性率は 44.1% で肝癌単独例に比べて低率であった. 重複した他臓器癌では胃癌が 12 例と最も多く, 次いで食道癌 7 例, 肺癌 6 例の順であった. 15 例が術前検査で発見されており, 胃癌や食道癌を念頭においた上部消化管内視鏡検査が大切であった. 両者ともに根治切除されたのは 15 例 (44.1%) で, そのうち 9 例が生存中である. 両者の根治的治療が大切であるが, 両者切除例と切除不能例の両者ともに肝不全など肝疾患による死亡例が多く, 重複癌の予後を左右したのは肝癌と肝機能であった.